令和6年度港区保育の質の向上のための研究プロジェクト報告書

子どもを中心とする保育士の連携・協働の在り方

～子どもにとってのよりよい人的環境作りをめざして～

港区子ども家庭支援部子ども政策課

はじめに

区では、未来を担う子どもたちやその保護者に、より質の高い保育を提供するため保育士は常に研鑽を重ねていくことが必要と考え、これまでの研修に加え、令和４年度に「保育の質向上研究プロジェクト」を立上げ、保育実践に活かせる課題、内容について公私立認可保育園が合同で研究を実施することとしました。

本プロジェクトを通じて、参加したメンバーは働く職場、保育環境が異なる保育士同士で子どもの育ちや日々の課題を語り合い、持ち寄った事例を共有して自らの園に戻って実践、振り返りを行うことで、気づかなかった保育の面白さやこれまで以上に子どもたちが楽しめる保育を考え、専門職ならではの新たな学びを得たことと思います。

今年度で３回目となる本プロジェクトでは、「保育士の連携・協働」をテーマとし、前回までの研究テーマ「子どもの心を大切にする言葉かけ」「子どもが主体的に遊べる保育環境を考える」を踏まえ、子どもの最善の利益を第一により子どもたちが輝いて育つ環境を実現するため、職員間のコミュニケーション、保育における良好なチームワークづくりについて研究をしました。

報告書には、人間形成に大切な乳幼児期に関わる保育士が専門性をもって主体的に働く上で大切なことや課題への気づきなど子どもたちに日々真摯に向き合うヒントが出されています。また、どのような環境においても「報・連・相」を実践するための具体的な方法は、若手職員のみならず、経験者においても改めて見直す内容となっています。

子どもたちを取りまく環境は今後もめまぐるしく変化をしていくことでしょう。保育現場のみならず、支援部も共に様々な課題に一丸となって取り組み港区から率先して保育の質向上を進めてまいります。

結びに、３年間にわたり、研究プロジェクトのアドバイザーとして多大なご協力をしていただきました山梨県立大学名誉教授、聖徳大学名誉教授の阿部真美子先生に厚く御礼申し上げます。

令和７年３月

子ども家庭支援部長　　中島　博子

目　　次

１　保育の質の向上のための研究プロジェクトについて　・・・・２

２　令和６年度　本研究のテーマ　・・・・・・・・・・・・・・・２

３　研究の方法　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・２

４　研究計画　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・４

５　実践報告　・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・５～４１

６　プロジェクトメンバーのアンケート　・・・・・・・・・・・４２

７　プロジェクトメンバーの感想から　・・・・・・・・・・・・４３

８　３年間継続して参加したメンバーの感想　・・・・・・・・・４４

９　おわりに　令和６（2024）年度の研究について　・・・・・・４５

１　保育の質の向上のための研究プロジェクトについて

区は、近年の保育環境の変化を踏まえ、保育の質を向上させるための取り組みの一環として、「保育士向けの研修の充実」を推進している。また、令和４年度５月から中堅保育士を対象に保育の実践的な力を身につけ、保育の質の向上を目指す研究活動に取り組んでいる。

２　令和６年度　本研究のテーマ

令和４年度は『子どもの心を大切にする言葉かけ』、令和５年度は『子どもが主体的に遊べる保育環境を考える』を主題テーマとして実践・研究を行なった。

令和６年度は研究メンバーからの提案を基に研修アドバイザーの阿部真美子先生と協議の上、保育現場における重要課題である『連携・協働』についてのテーマを設定した。保育士の行動は子どもにどのような影響を与えているのか、人的環境に焦点を当て、職員同士や保護者との関わりについて研究した。

令和５年４月にこども基本法が施行され、同年 12 月には「はじめの 100 か月の育ちビジョン」が子ども家庭庁より策定された。こども基本法を基に「こどもまんなか社会」の実現を目指すという大きな価値転換をふまえ、乳幼児の健やかな成長を守っていくための人的環境の重要性に着目した。

メンバーが職員同士や保護者等の人的環境に関わる事例を抽出し、保育の中の連携や協働が子どもたちとって大切だということ、保育士の意識や保育の質の変化等を、実践と検討を繰り返して研究を進めた。

３　研究の方法

区立保育園、私立認可保育園、港区保育室の中堅職員（保育士勤務歴３年から 13 年）25 名が参加し、以下の手法で進める。

【事例研究】

研究グループメンバー25 名を５グループに分け、各自の事例についてグループワークを実施し、課題を抽出。その後、自園で実践し検証した。

（１）事例収集期間および事例数

令和６年５月から令和７年２月

（1 人４テーマ：全 100 事例）

（２）　各テーマと期間

１　保育補助職員との連携・協働	５月 16 日頃～７月 10 日頃
２　仲間同士の連携・協働	７月 12 日頃～９月 10 日頃
３　保護者と保育士の連携・協働	９月 13 日頃～12 月 17 日頃
４　上記以外のテーマをグループ内で決定	12 月 19 日頃～２月５日頃

※本報告書５ページ以降の事例報告は、このうち６月から１月の事例をグループごとにまとめた内容を報告。４のテーマについてはグループごとにテーマが違う為各テーマ内に含む。

※２のテーマについては１回の実践報告に留めるが、４の期間で２のテーマを選択したグループは継続研究として２回目の報告を行う。

（３）　研究方法

グループディスカッションの中で事例を出し合い、各自実践し検証した（実践記録用紙は表１参照）。研究プロジェクト内で実践内容の報告、意見交換、課題の確認を行い、それに基づき更なる実践内容に取り組んだ。また、意見交換の際は付箋に気づきを書き出して共有する「付箋ワーク」（図１参照）を実施した。

（４）　研究グループ構成

研究メンバーの平均勤続年数は以下のとおりである。

グループ	平均勤続年数	グループ	平均勤続年数
１グループ	５年	４グループ	５年
２グループ	６年	５グループ	９年
３グループ	５年		

※各グループは、乳児・幼児等に分けず、様々なクラスの担任が混在している。

表１　実践記録用紙

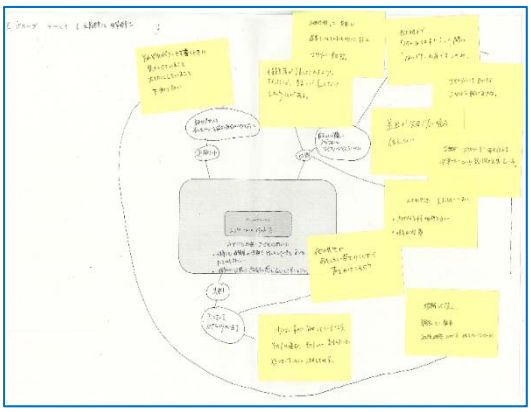
子どもを中心とした連携・協働（実践記録）
◎記入の際に留意すること
・子どもの姿、思いからテーマを決め、なぜそうなのかを考え計画を立てる。
◎振り返りをするときに留意すること
・テーマに沿って実践できたか
・子どもの姿、子どもの思いが実践につながっているか
・実践の中でよかったと思った内容
・実践の中でこうすればよかったと思った内容（課題）
・課題を踏まえて、次の実践計画の作成をどう考えていくか
→より具体的な計画を話し合いの中で考えていきましょう。

テーマ１　：　クラス担任と保育補助

○グループ	グループ内テーマ 『　　』	
子どもの姿 子どもの思い ① ② ③	連携・協働で気になっていること ① ② ③	計画 ① ② ③
振り返り		
次回の課題		

図１　付箋ワーク

事例やテーマに対し、「この場合は、こうすると
連携がとれる」等各自の意見を書き出し共有した。
付箋１枚につき一意見を書き出すことで、
短時間で考えを整理することができた。



４　研究計画

令和６年５月から令和７年２月まで計８回のプロジェクトでの事例報告･意見交換を経て、本報告書を取りまとめた。第７回と第８回は期間が短かく取り組むことが困難な園もあったため一部割愛する。

	テーマ	日程	研究の計画及び内容
第１回		令和６年 ５月１５日	研究テーマ決定、確認 研究の目的の設定、研究の方法の確認 グループで実践計画作成（５月～１１月）
第２回	保育補助員 との 連携・協働	６月１３日	実践報告、意見交換、グループ発表、次回への計画
第３回		７月１１日	実践報告、意見交換、グループ発表、まとめ
第４回	仲間同士の 連携・協働	９月１１日	実践報告、意見交換、グループ発表、まとめ
第５回	保護者と 保育士の 連携・協働	１１月８日	実践報告、意見交換、グループ発表、次回への計画
第６回		１２月１８日	実践報告、意見交換、グループ発表、まとめ グループで新たな課題(テーマ)の取組
第７回	各グループ内 決めたテーマ について研究	令和７年 １月１５日	新たなテーマでの実践について報告、意見交換 報告書作成作業
第８回		２月　６日	実践から学んだ内容について振り返り（まとめ） 報告書作成作業

５　実践報告

テーマ毎に各グループでの取組等についての報告書を作成した。
テーマは以下のとおりである。

テーマ１『保育補助職員との連携・協働』
～保育の仲間として～

テーマ２『仲間同士の連携・協働』
～先輩と後輩を意識して～

テーマ３『保護者と保育士の連携・協働』
～共に育てる～

テーマ１から３について

具体的な事例に取り組むにあたり、プロジェクト内でテーマの現状と課題、及び成果を確認した。
その結果を踏まえ、各グループは、より具体的な実践テーマを決定し、実践した。

テーマ　1

保育補助職員との連携・協働

～保育の仲間として～

課題と研究

保育園では、担任以外で保育の補助として、会計年度任用職員や派遣職員など様々な職員が子どもと関わっている。また、職員体制によっては他クラスの職員が保育を行う場合もある。保育現場において、保育補助職員は担任と連携・協働しながら子どもの育ちを支える重要な役割を果たしている。しかし、コミュニケーション不足や役割の曖昧さが原因で、保育補助職員の主体性や自信が十分に発揮されないことが課題となっている。

テーマ１では、保育補助職員が自信を持ち、主体的に子どもと関わることで、保育補助職員の役割や、その具体的な方法について実践を通じて考えた。

研究による期待される成果

保育補助職員が主体的に関わることの重要性を認識し、保育補助職員と担任の連携が強化される。援助の方法の共有により子どもが戸惑う場面が減り、情緒の安定に繋がる。必要な情報を可視化し、口頭で補足することで、子どもの状況を深く理解し、適切な援助ができるようになる。また、職員間のエピソード共有により新たな気づきが生まれる。保育補助職員との関係作りにより担任の負担が減り、子どもと過ごす時間が増える。

各グループの実践テーマ

＜１グループ＞保育補助職員が主体的に子どもに関わる機会作り
＜２グループ＞生活面の援助に入ってもらった際の情報共有の仕方
＜３グループ＞おむつ交換・トイレトレーニングについての共有
＜４グループ＞クラス運営を上手く進めていくための保育補助職員への声かけ
＜５グループ＞子どもへの関わり方の共有

1グループ

実践テーマ

保育補助職員が主体的に子どもに関わる機会作り

どのようなグループ研究をするか、子どもの様子を通してみた研究課題

＜研究課題＞

- 「意見や質問を自由に言えるコミュニケーションが不足しており、時間の確保や経験値の違い、年齢差などでタスクが伝えにくい。
- 担任と保育補助職員の対応の違いが原因で、子どもたちが戸惑ったり、情緒が不安定になったりすることがある。
- 集団行動が苦手で一対一の対応が必要な子どもが増えている。

- 理解と協力を得るためにこちらから声をかけ信頼関係を築く。
- 保育補助職員も子どもにとっては保育を担う仲間だという自覚を育てる。
- 担任の手の回らない部分に保育補助職員の存在が非常に重要である。

子どものねがい

「安心して自分の意見や気持ちを表現できる環境で過ごしたい」

保育士のねがい

「保育補助職員も子どもの育ちを支える仲間という意識を持ち、主体的に子どもに関わってほしい」

実践計画（1回目）

- 子どもの様子や重要な情報を伝えるために、共有ノート（写真１）を作成したり、出席簿に付箋を使用したりして情報を伝達する。
- 保育の様子や子どもの状況を伝える際に、雑談や気軽な会話を取り入れる。（信頼関係作り）
- 言われたことだけをやるのではなく自信を持ってもらうために、保育補助職員に行事の特定のコーナーを担当してもらうことで、それぞれの能力を発揮できる場を提供する。

写真１

＜共有ノート見本＞
子どもの様子、留意点、保育で気を付ける事が短い文で分かりやすく記入してある。

実践からの振り返り

- 個人情報保護の観点から、共有ノートの扱いが難しく、事務室に置く必要があるため、記入や確認がしにくい。付箋は剥がれやすく活用が十分にできなかった。
- 隙間時間を活用することで、話しやすい関係性が築けた。
- 保育補助職員に夏祭りのコーナーを担当してもらうことで、子どもたちからの親しみが増し、保育補助職員のやりがいにも繋がった。

実践計画（２回目）

- 一対一の対応を必要とする子どもがスムーズに活動に入れるよう保育準備の内容等がわかりやすいチェックリストを作成する。
- 日常から気軽に声を掛け、会話を心掛ける。
- 行事の中で保育補助職員が主体となり、得意分野（製作・裁縫・ピアノ等）を活かせるようなコーナーを作る。

実践からの振り返り

- 日頃から保育補助職員との会話で関係性を構築し、様々な業務が頼みやすくなった。
- 内容をチェックリストで可視化したことで、伝達がしやすくなった。
- 振り返りで、保育補助職員側から「やってみて良かった」「子どもの反応が見られてやりがいに繋がった」等、良い反応があった。
- 保育補助職員同士の会議（夏まつりのコーナーを考えるため）を行うことで、保育補助職員の「子どもの育ちを支える仲間」としての意識が向上し、コミュニケーションが取りやすくなった。

研究成果（実践したことが子どもにとってどうだったか）

- 保育補助職員との関係作りにより、担任の負担が減り、子どもと過ごす時間が増え、子どもの情緒が安定した。
- 集団行動が苦手な子に対しての保育準備を視覚化することにより保育補助職員が理解したことで、一対一の対応が円滑になり、子どもが自分のペースで過ごせるようになった。
- 保育補助職員も主体となって行事（夏祭り）を盛り上げたため、子どもたちの行事への意欲が更に高まった。保育補助職員の「子どもの育ちを支える仲間」としての意識も高まった。
- 共有ノートや付箋の管理は難しく、定着に時間がかかるため、既存の視診簿の記入方法を工夫して運用する方が良いということが分かった。
- 時間がなくても、明確な指示を可視化し、常にコミュニケーションを取ることで、保育が円滑に行えるようになった。

2グループ

実践テーマ

生活面の援助に入ってもらった際の情報共有の仕方

どのようなグループ研究をするか、子どもの様子を通してみた研究課題

＜研究課題＞

- 食事介助の伝達方法やトイレトレーニング中の子どもへの援助方法などの共有が難しい。
- 職員によって対応が違うと子どもが戸惑ったり、「いつもはこうやっているのに」と自分の思いが伝わらず嫌な気持ちになったりする。

→

- 子どもの生活面での援助方法の共有の仕方を探る。
- 日々の子どもの様子等の情報共有を漏れなく行うためにどうすれば良いかを考える。

子どものねがい

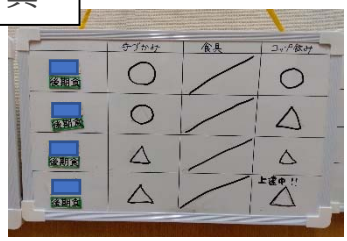
「いつも同じように対応してほしい、そうすれば安心できるのに」

保育士のねがい

「子どもが戸惑わずにスムーズに援助を受けられるように、統一された方法で対応する」

実践計画（1回目）

写真



- ホワイトボードの活用
  ホワイトボードで食事の形態表（写真）を作成し、テーブルから見える位置に配置する。食事介助に関する情報が職員全員に共有されやすくする。
- 引き継ぎノートの利用
  引き継ぎノートを活用し、保育補助職員にも保育に入る前にクラスの様子を確認する。
- 個別トイレトレーニング表の作成
  個別トイレトレーニング表を作成し、排泄時間等の記入をしてもらう。

実践からの振り返り

- 食事形態の表は、職員が保育補助職員に子どもの様子を聞き取り、情報を更新することが大切。
- 担任以外が入った時にホワイトボードやノートを活用することで、説明の時間が減り、スムーズに保育ができた。
- 記入を忘れる職員もいるため、まずは習慣化させることが重要。
- 職員の共有化にばらつきがあるため、共通意識を持つという課題が残った。

実践計画（２回目）

- １回目の実践（食事形態表・トイレトレーニング表・クラスの子どもの引き継ぎノート)をすべて継続。
- 気になったことは、その時に声に出して職員間で伝え合う。
- 介助の仕方を言葉で伝えるだけではなく、実際にやっているところを見せながら伝える。

実践からの振り返り

- 食事の介助方法は、言葉だけでなく実際に見せることで、しっかりと伝えることができた。
- トイレトレーニング表は継続的に記入することで、少しずつ定着していった。

研究成果（実践したことが子どもにとってどうだったか）

- いつも同じ対応をしてもらうことで、子どもがこの後の活動が分かり、安心して過ごせるということに繋がっていくことが分かった。
- 援助の方法を視覚的にも伝えていくことで、職員間の意見の相違を少なくできた。その結果、和やかな雰囲気の中で子どもが安心して援助を受け、できることが増えていった。
- 情報共有していくことで保育士同士が同じ対応をすることができ、子どもたちが戸惑う様子がなかった。
- 職員同士の連携が取れた結果、職員それぞれがどう援助して良いのか分からずに悩んだり、どのような対応をすれば良いのかと戸惑ったりすることが減った。

3グループ

実践テーマ

おむつ交換・トイレトレーニングについての共有

～みんなで見守る、みんなの子～

どのようなグループ研究をするか、子どもの様子を通してみた研究課題

＜研究課題＞

- 全クラス共通して、排泄に関して困っていることがある。排泄の場面では保育補助職員に関わってもらう部分が大きく、担任と保育補助職員との細かい連携が必要となるが、情報共有方法が明確になっていないため職員によって対応が違ってしまう。
- 排泄の場面でこだわりを持つ子がいて、おむつの柄やおむつ交換、トイレに行く事を拒む子どもがいる。

- 排泄に関しての悩みを解決するために情報共有を明確にする。
- 排泄に関して、保育補助職員に関わってもらう部分が大きく、担任と保育補助職員の間で細かい連携が必要である。
- 子どもが自分で選び、気持ち良くトイレに行かれるよう関わり方を工夫する。

子どものねがい

「気持ちよくトイレに行きたいな」

保育士のねがい

「保育補助職員にもクラスの一員という意識を持ってもらいたい」

実践計画（1回目）

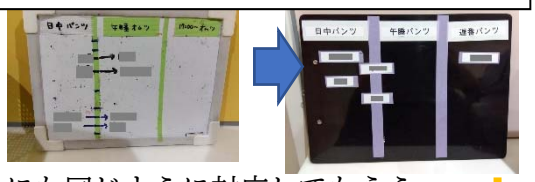
① 子どもの情報共有

ホワイトボードやノートを活用し、朝の時間や補助に入る前に子どもの状態を伝える。また、担任の関わり方（うまくいった・いかなかった声掛けなど）を伝え、打ち合わせで子どもの様子や関わり方を話し、共通理解を深める。

② トイレに行きたがらない子の対応

トイレ内に楽しめる工夫をし（シールや褒める等で意欲に繋げる）、おむつやパンツの種類を選べるようにする。また、「トイレに行こう」だけではなく、その子の名前を呼ぶことで“自分に対して話しかけられている”と認識ができるようにし、子どもが好きなもの（新幹線など）を使って誘う。

写真　ホワイトボードを整理し、改善していった。



実践からの振り返り

①ホワイトボード（写真）の活用を試みたが、個人情報のため、置き場や共有の仕方が難しかった。情報共有をもとに排泄が成功した際には、職員全員で子どもを褒めることで、全員で見ていることが子どもに伝わった。また、保育補助職員にも同じように対応してもらうことでクラスの一員という意識を持つことができた。

② ０歳児クラスでは、寝返りやお座りができるようになった子どもが、おむつ交換台に横になることを嫌がる姿が見られたため、嫌がることを減らすためにトイレ専用の玩具を用意することにした。また、履きたいおむつがない時の対応が難しいため、２回目の実践計画に続く。

実践計画（２回目）

【情報共有】

- ホワイトボードやノートの活用方法を検討し、場合によっては口頭で伝える。
- 職員間で子どもの情報を共有する時間を作り、成長や嬉しいことを話す。
- パンツ移行状況をその都度口頭でこまめに伝え、共有する。

【関わり方】

- トイレ内専用の玩具を製作・実践。トイレに子どもが好きなキャラクターの絵を貼る。
- トイレに行くことを嫌がる子どもへの対応を話し合い、統一する。子どもが自己選択しながらトイレに向かえるようにする。

実践からの振り返り

【関わり方】

- トイレ専用の音が鳴る玩具や保育士・友だちと一緒に行くことで、おむつ交換やトイレに向かうことがスムーズになり、子どもが自分で選択しながらトイレに向かえるようになった。
- 排尿の成功やトイレで座れたことを職員間で共有し、みんなで褒めることでトイレトレーニングに繋げることができたが、キャラクターの絵には興味が薄れやすかった。

【情報共有】

- ホワイトボードやノートの活用は時間の確保が難しく、こまめに端的に伝える方が効率的だった。午睡時のおむつ着用などの情報は、ホワイトボードで表にして活用すると理解しやすい。
- 担任と同じ対応を共有することで、保育補助職員もクラスの一員として意識を持つことができた。また、そのことから職員間の連携が良くなり、子どもの姿を共有できた。ポジティブな内容を共有することで、職員間のコミュニケーションも円滑になった。
- クラス間の情報共有をきちんとすることで、家庭との連携もスムーズにできた。パンツ移行状況などの情報共有が難しいが、こまめな情報共有が子どもの意欲に繋がるため、情報共有の大切さを改めて感じた。

研究成果（実践したことが子どもにとってどうだったか）

- 情報共有をしっかりと行い、子どもに対しての対応を共有したり、話し合ったりしていたことで、子どもたちも意欲が高まり、意欲的にトイレに向かう様子も見られた。
- ポジティブな声かけとコミュニケーションの重要性： 子どもや職員に対してポジティブな声かけを行うことで、全体の雰囲気が良くなり、職員同士のコミュニケーションが円滑になった。
- ノートの活用による情報共有の効率化： 日常の情報共有をこまめに行うためにノートを活用し、特に大切な内容を記入することで、情報共有がしやすくなり、共有漏れを防ぐことができた。

4グループ

実践テーマ

クラス運営を上手く進めていくための保育補助職員への声かけ

どのようなグループ研究をするか、子どもの様子を通してみた研究課題

＜研究課題＞

- 保育補助職員が現場に入る方法やタイミング、準備やサポートの手順、役割分担、保育方法のガイドラインが不明確であり、さらに保育士間の保育観の違いを調整するためのコミュニケーションが不足しているため、子どもが混乱する。
- 保育補助職員が強い口調で言うと、子どもが悲しい気持ちになる。

「保育における効果的なサポート方法」
「保育観の違いを調整するためのコミュニケーション」を研究テーマにする。

子どものねがい

「安心して遊びたいし、優しく話してほしいな」

保育士のねがい

「明確なガイドラインと十分なコミュニケーションがほしい」

実践計画（1回目）

- 子どもができるようになったこと（着替えや排泄など）について職員間で共有し、適切な言葉掛けや褒め方について保育補助職員と担任で認識をすり合わせる。
- ヒヤリハットの記入を全職員で回覧し共有する。
- 保育補助職員にも、その日の予定や生活の流れを事前に伝え、保育が円滑に進むようにする。例えば、「明日は散歩に行く予定です」と前日に伝えることで、当日の準備がスムーズに行われるようにする。

実践からの振り返り

- 担任の思いや子どもへの関わり方、言葉掛けを共有することで、保育がスムーズになった。
- 保育補助職員と保育について話す機会が増え、些細なこと等の会話もできるようになった。
- 口頭での情報共有に漏れがあったため、伝わりやすい方法を考える機会になった。

- 子どもの様子や背景を記録に残すことで、保育補助職員が確認しやすくなった。
- 担任も保育の振り返りをするべきだと気づいた。

実践計画（２回目）

- ３歳児クラスでは、毎月子どもの様子や保育者の関わり方を記入し共有する用紙を作成し、確認後にチェックを入れるようにする。
- 不適切保育に関するチェックリストを用意し、保育時間内で話し合う機会を設ける。
- 保育補助職員が保育で困っている時には、担任がさりげなく様子を聞きながら対応を変わるなどしてサポートする。

実践からの振り返り

- 事前に翌日の活動内容を伝え、情報共有ファイルを作成することで、保育補助職員と担任の対応の違いがなくなった。
- 保育補助職員が慌ててしまう時には、担任が保育を代わることで心に余裕が持てるようになり、子どもの心の安定も保たれた。
- 情報共有ファイルで共有時間が短縮された。
- 保育補助職員から見た子どもの姿を記入してもらうことで、子どもへの理解が深まった。
- チェックリストは、定期的に行わなければ変化が分かりづらいという課題があった。

研究成果（実践したことが子どもにとってどうだったか）

- 保育補助職員と信頼関係を築くことができたことで、保育補助職員が担任保育士に些細な悩み事や頼み事などを伝え合いやすい関係になり、より保育がしやすく、子どもが過ごしやすくなった。
- 同じ対応を受けることで、子どもが「この先生はダメっていうけど…」と感じることがなくなり、安心感を得た。
- 担任と保育補助職員が情報共有する方法を統一することによって、忙しい保育の中でも、考えや方法のすれ違いが少なくなった。
- 子どもの家庭環境や幼い時からの継続した姿を情報共有することで、子どもが「分かってくれている」とリラックスしている様子だった。
- 大変そうな時に保育の対応を代わると、保育補助職員の心に余裕が見られた。それにより子どもへの言葉遣いが優しくなり、子どもが安心して遊ぶ様子が見られた。
- 保育補助職員と会話が増え、保育補助職員の『分からないこと』『困っていること』が分かり、担任が自分の保育を見直すきっかけになった。

5グループ

実践テーマ

子どもへの関わり方の共有

どのようなグループ研究をするか、子どもの様子を通してみた研究課題

＜研究課題＞

- クラスで大切にしたい保育内容、個別に必要な配慮・援助などをどのように共有するか。➡明確な共有方法がない。
- 発達状況に応じて丁寧な配慮が必要な子どもがいるが、職員によって関わり方が違う。

- 保育補助職員にも日々の情報共有をこまかく行う。
- 打ち合わせに保育補助職員にも参加してもらい、子どもへの配慮事項、発達段階の共通認識を持ってもらう。

子どものねがい

「自分の成長に合わせて、やさしく見守ってほしい」

保育士のねがい

「子どものために職員間で一貫した対応を取りたい」

実践計画（1回目）

【一人一人の姿の共有や生活面での援助方法について】

- 日々変わっていく子どもの姿をこまめに口頭で伝えていく。クラスの打ち合わせの際には他クラスにも協力してもらい、可能であれば保育補助職員にも参加してもらうようにしていく。
- 姿を伝えた上で、“こういう風に援助をしてほしい、こんな場面は見守ってほしい”ということを具体的に伝え、みんなが共通認識を持って関わることができるようにしていく。

実践からの振り返り

- 複数担任なので、全員が共通認識をもって同じ関わりをすることで、子どもたちも混乱せず安心して過ごせると感じた。
- なぜこういう関わりをするのか、保育の意図を保育補助職員にも伝えていくことで、保育観のすり合わせや相互理解にも繋がっていくと分かった。
- 会計年度職員など、クラスに入っている職員だけではないので、短時間クラスに入る保育補助職員などへの子どもの情報共有の仕方はどのようにしたら良いのか、工夫していくと同時に課題であると感じた。
- 担任も保育の振り返りをするべきだと気づいた。

実践計画（２回目）

- １回目の実践でトイレトレーニングが難航しており、子ども一人一人の進み具合やどういった配慮が必要なのかなど、不明瞭な点があった。
  ➡ホワイトボードで子どもの状況などを周知し、同じ対応ができるようにする。

実践からの振り返り

- トイレトレーニングが進み、パンツで過ごせる時間が増えた。
- その日の心情によってパンツを過ごす意欲に差があり、保育補助職員も援助に戸惑う場面もある。必要な情報はホワイトボードで可視化し、詳しい経緯などは細かに口頭で知らせ合うことで保育補助職員も援助に迷うことが少なくなった。
- 子どもの気持ちや姿に合わせた援助を行えると良いと感じた。
- その日の子どもの状況に合わせて援助をするために、情報共有が不可欠であると再認識した。
- 援助方法を統一することで、子どもが戸惑う場面が減り、情緒の安定につながった。

研究成果（実践したことが子どもにとってどうだったか）

- クラス内で援助を統一できたことで、声掛けや援助に一貫性が生まれた。そのことから子どもが戸惑う場面も少なくなり、情緒の安定に繋がっていった。
- 限りある時間の中で保育補助職員も含めた全員に細かな様子などを共有するのは現実的とは言えず、必要な情報を可視化し、細かな補足は口頭で確認し合うことで、子どもたちの状況をより深く理解し、適切な援助ができるようになった。
- 前述のとおり、その日の姿に寄り添いながら援助を行うためには、口頭で確認し合うことが不可欠であり、保育をする上でとても重要なプロセスであると分かった。
- 口頭での共有が増えたため、困った場面での援助も求めやすくなった。
- 保育の軸を明確にし、保育観を共有する機会を持つことが大事だと分かった。
- ノートやホワイトボードを活用して視覚化することで、子どもの姿の捉え方にズレが生じにくくなった。
- 一人の子どもに対してのエピソードが保育士の数だけあるため、その共有をすることで自分が知らなかった姿を知り、新たな気づきが生まれる。
- 視覚化はツールの一つとして捉え、最終的な共有や確認は口頭で行うことが良い。しかし、時間の捻出が課題であり、クラス単位ではなく園全体として取り組む必要があると分かった。
- 最も大事なことは、保育士同士もお互いに思いやりや、尊敬の気持ちを持つことだと確認した。

◆　実践を通しての気づき　◆
～皆さんに伝えたいこと～

メンバーがディスカッションして伝えたいことを
イラストや短いメッセージにしました。

これが
よかった！

★やっぱり情報共有！子どものために。
★共有ノートで視覚化すると
　　共通理解が深まる！
★ホワイトボードとノートの使い分けを
　しながら情報共有していけると良い。
　（担任間でも便利だった）
★『言葉で伝える』と『目で見て分かる
　ように記録する』２つのツールで
　連携がうまくいく。
★書くときは、要点をとらえ簡潔に！

★「なにを」「どうやって」伝えればいいか
　整理することが大事。
★子どもの成長をたくさん共有しよう！
★日頃から意識してコミュニケーションを取る
　ことによって会話が広がる。
　　➡なんでも言い合える関係性作り
★たくさん話して、子どもを知ろう！

★同じ職場で働く仲間。
　尊敬の気持ちを持とう！
★それぞれの考え、視点、気付き、
　悩みがある。
★子どもにとって
　大人の年齢・経験値は関係ない。
★これ大事！
「笑顔で挨拶、たのしい雰囲気作り」
★連携は１日にしてならず。
　すぐに結果が出なくても続けることが大事。

テーマ　2

仲間同士の連携・協働

～先輩と後輩を意識して～

課題と研究

保育園では様々な経験歴のある保育士が、チームワークをもって子ども達の成長を見守っている。

職場内での人間関係は仕事をしていく上で最も重要であることから、クラス担任の保育士のチームワークを高めていけるような実践へと繋げる。クラスの職員関係が良好であれば、保育の中での問題についての解決力が高まる。職員が明るく元気に仕事ができるよう、プロジェクトメンバーが今までの経験を基に実践に取り組むことにした。

研究による期待される成果

自らが率先してクラスのチームワーク作りをすることで、互いの保育や仕事について話し合いができる。その結果保育士同士の信頼関係が深まり、協力体制が強化される。

保育士が互いにサポートし合うことで、子どもへの保育の質が向上し、問題解決能力も高まる。保育士同士がサポートし合う中で業務の改善点を共有でき、フィードバックを通じて保育士のスキルの向上ができる。

各グループの実践のテーマ

＜１グループ＞保育中の見えない役割分担
＜２グループ＞職員同士のコミュニケーションの取り方
　　保護者へのエピソードの伝え方
＜３グループ＞園内の雰囲気が良くなるコミュニケーション
＜４グループ＞お互いにより相談しやすい関係作り
＜５グループ＞話しやすい雰囲気作り

1グループ

実践テーマ

保育中の見えない役割分担

どのようなグループ研究をするか子どもの様子を通してみた研究課題

＜研究課題＞

- 保育士が互いの状況について把握していないため、保育の役割分担が曖昧になっている。
- 先輩保育士と後輩保育士がお互いに遠慮して言いたいことが言えずにいる。

- 保育士の作業の状況把握をし役割分担を明確化する。
- 先輩後輩間の円滑なコミュニケーションの方法を研究する。

子どものねがい

「どの保育士も同じように援助や関わりを持って接してほしい」

保育士のねがい

「保育士同士が互いに意見を出し合い、子どもへの対応について共通認識を持ちたい」

実践計画（1 回目）

- 保育中の作業一覧表を作成する。
  （例：人数報告、散歩準備の内容、食事の人数報告等）
- 保育の作業について、互いに声に出して共有する。
  （例：「人数報告に行ってきます」「散歩準備に出ます」等）
- 年間の保育担当者を決めていく（例：主・サブ・雑等の割り振りをする）
- 自分が率先して発信し、報告しやすい雰囲気作りをする。
  （例：園の連絡を自分から伝える、自分のことを話す、挨拶、笑顔）

実践からの振り返り

- 見えない役割分担を可視化したことで、仕事の効率化ができた。
- 声に出して共有することで、作業状況がわかり、互いに配慮ができた。
- 事前に役割分担を決めることで、イレギュラーな事態にも対応可能になった。
- 日頃からコミュニケーションを取ることで、関係性が深まり連携がスムーズになった。

研究成果（実践したことが子どもにとってどうだったか）

- 作業の分担化ができたことで保育の余裕が生まれ、子どもへの視野が広がり、噛みつきや怪我を防ぐことができた。
- 保育士同士が円滑に連携をとることで、子どもとの関わりや子どもとの遊びに集中でき、子どもの情緒の安定に繋がったと感じた。
- 役割分担をして、保育以外の仕事（係や行事等の作業など）の効率化を進めることができた。子どもとの関わり方を保育士同士で共有したことで、改めて考えることができた。
- 保育について話し合うことで視点が広がり、結果的に保育の充実に繋がった。
  - 後輩としての視点：先輩保育士の保育を見て学ぶことができた。
  - 先輩としての視点：後輩にアドバイスをすることで普段の保育で意識していることなどを言語化でき、より専門性が深まった。

２グループ

実践テーマ

職員同士のコミュニケーションの取り方

保護者へのエピソードの伝え方

どのようなグループ研究をするか子どもの様子を通してみた研究課題

＜研究課題＞

- 子どもが安心して過ごすためには和やかな環境作りが必要な事は分かっているが、日々の忙しさで保育士に心の余裕がない。
- 打ち合わせを効率的に、職員同士が互いの意見を言い出しやすくしていきたいが、一部の職員しか話さず円滑な話し合いとは言えない。

- 保育士の心に余裕を持たせるために業務の効率化やスケジュールの見直しをする方法を考える。
- 打ち合わせを円滑化し保育士同士が互いの意見を言いやすくするための改善策を研究する。

子どものねがい

「保育士を信頼し安心感を持ち、遊びや生活の中で挑戦できる環境がある」

保育士のねがい

「子どもが安心でき、保育士同士も学びあう環境を作りたい」

実践計画（1 回目）

- 自分自身がいつでも笑顔で会話をすることを心がける。
- クラス会議の際に、話し合いを活性化できるようにアイスブレイクをする。
  （例：テーマを決めて、趣味や最近あったことなど保育以外の話をする）

- クラス担任同士で、午睡中などに話をする時間を作り、子どもの様子や保育で気づいたことを話し合う。

実践からの振り返り

- 上記の実践により、職員同士のコミュニケーションが増え、保育がスムーズになった。
- 保育以外の話をすることで、職員同士の理解が深まり、会話が増えた。
- 話をする時間の確保や他の職員の理解を得ることが難しかったため、打ち合わせの最初の５分を使って次回から実践することにした。

実践計画（２回目）

- お互いにノートを書く際に気をつけていることや大切にしていることを話し合い共有する。
- 子どものその日のエピソードを話し合う。
- 実際にその場面を見ていなくても情景が思い浮かぶようなノートや全体掲示板の書き方を意識し、口頭で伝える際には身振り手振りを交えながら伝えていく。

実践からの振り返り

- 午睡の時間には会議が多く、全員で話し合う時間が取れなかったため、全員でなくても話し合える時間を確保した。
- クラス担任の保育士から個別に意見を聞いたり、クラスの打ち合わせの中で時間を作ったりし、それぞれがノートを書く上で大切にしていることを話し合ったことで、共通意識を持ちやすくなった。

研究成果（実践したことが子どもにとってどうだったか）

- 保育士同士のコミュニケーションが円滑であれば、子どもたちが安心して過ごせることを理解できた。実践を通じて、子どもたちにも笑顔が増え、自分の思いを存分に出してのびのびと過ごしている姿を見ることができた。
- 共通意識を持ちやすくなったことで、保護者への伝え方が分かりやすくなった。また、信頼関係を築き、保護者にも安心してもらうことができた。
- 職員の雰囲気が良くなると、子どもたちが安心して過ごせると感じた。
- 子どもの対応に関して共通意識を持つことで、保護者支援も円滑になった。
- 職員がお互いに興味を持ち、一緒に働く仲間としての共通意識を保持して全員で風通しの良いクラスを目指すことが良いと思った。

3グループ

実践テーマ

園内の雰囲気が良くなるコミュニケーション

どのようなグループ研究をするか子どもの様子を通してみた研究課題

＜研究課題＞

- 先輩保育士と後輩保育士の価値観の違いから、コミュニケーションの難しさがある。
- 人によって態度が変わったり、報告・連絡・相談が不足していたりする保育士に対して、コミュニケーションの重要性を認識してほしい。
- 子どもへの保育士の対応がそれぞれに異なるため、子どもが戸惑っている。

- 互いの意見や価値観を共有できるようなミーテングや雑談ができる環境を作る。
- コミュニケーションをとるタイミングや方法についての研究。
- 保育士同士の子どもへの関わり方についての意見交換や、互いの理解度を確認する機会を作る。

子どものねがい

「保育士同士が協力し合い、心地よい雰囲気の中で安心して自己表現をしたい」

保育士のねがい

「子どもが安心できる環境を提供し、信頼関係を築いていく」

実践計画（1回目）

- 短い時間でも話し合いの時間を設け、一日一つだけでも話す意識をもつ。
- 話しかけても良いタイミングをうかがう。

- 普段からコミュニケーションをとり、話しやすい雰囲気を作る。
- 後輩保育士に対しては、理解ができているかその都度確認する。

実践からの振り返り

- 積極的に話す場を設けることで、相談しやすくなった。
- 話しかけるタイミングをうかがうことで話しかけやすくなった。しかし、細かく確認しても「大丈夫です」という返答が多く、理解や作業が不十分なことがあった。
- 仕事内容と作業の確認を含め、自分で期日を決めてもらい、計画的に作業が終わるよう意識してもらった。
- 保育の仕事について、何度も伝えたり、声をかけたりしているが、休憩時間は一人で過ごすことが多く、仕事以外の雑談をすることが難しいという課題がある。

研究成果（実践したことが子どもにとってどうだったか）

- 積極的なコミュニケーションにより、子どもの様子の共有やクラス保育の確認漏れがなくなり、生活の流れがスムーズになった。
- 保育士が明るくなったことで子どもたちも自然と活き活きと活動するようになり、保育が楽しくなった。
- 子どもの情報共有や関わり方を話し合うことで、他の保育士の保育観を知った。また、保育のねらいを伝えていくことで、子どもとの関わり方が人によって変わることがなく情緒の安定に繋がった。
- コミュニケーションのハードルが下がり、自分自身や子どもへの関わりに余裕が生まれ、子どもも大人も全体的に笑顔が増えた。
- 子どもの普段の様子を話題にした保育士間での話し合いの中で、子どもへの理解を共有でき、保育の充実に繋がった。
- 相談しやすくなったことで普段のコミュニケーションの大切さを感じた。
- 保育士は日々の忙しさの中で相手を気遣うことが減っているように感じたが、実践をしていくうちに相手を気遣うことを意識できた。
- 後輩保育士に対しては多くを求めすぎず、一つずつ課題を解決していけるように丁寧に対応していくことが大切だと感じた。
- 一人で解決しようとせずに、周りの職員に相談していくことが早い解決の糸口になった。

４グループ

実践テーマ

お互いにより相談しやすい関係作り

どのようなグループ研究をするか子どもの様子を通したみた研究課題

＜研究課題＞

- 保育士間で情報共有する時間を作りたいが、日々の保育の忙しさの中でしっかりと話し合う時間を作ることができない。
- 普段から雑談などが少ないため、チームワークを作っていくための保育士同士の関係性が出来ていない。

- 短時間で効率的な情報共有を目指すためのスケジュール設定や時間を作る。
- チームワークを良くするためのコミュニケーションの機会を増やす方法、チームワークの強化を図るために何ができるか探る。

子どものねがい

「安心できる雰囲気の中で保育士を信頼して自分の気持ちを表現したい」

保育士のねがい

「保育士同士が互いの保育を受け入れて、子どもへの対応を統一したい」

実践計画（1 回目）

- 保育士だけで話せる環境をつくり、各自が現在抱えている問題を話し合う。（具体的な話し合いの時間は、午睡中や終業時以降の引継ぎが終わった後）
- 幼児クラスでは、昼の時間で 15 分ほどの決まった時間を設定して職員が集まれるようにし、情報共有をおこなう。

実践からの振り返り

- 保育士だけで話合う時間を作ったことで、各自の仕事内容等での問題を相談し合うことができ、気持ちが楽になった。
- 後輩保育士へ積極的に声を掛けていくことで会話が生まれ、クラスの子どもや保護者とのやり取りに関する悩みを共有する機会が増えていった。
- 幼児クラスでは時間で集まって話をする機会を作ったことで、他クラスの様子についても話をするようになり、クラス同士で相談しやすい関係が築かれた。
- 会話だけではなく、付箋やメモ等を使って情報を共有することで忘れることが少なくなった。

研究成果（実践したことが子どもにとってどうだったか）

- 情報共有を行ったことで、保育士間の認識のズレが少なくなり、子どもたちに対する対応が統一された。
- 保育士の対応が変わったことにより、子どもたちの混乱が減り、保育士の対応の違いも解消されていった。
- 保育士同士の会話が増えたことで、関係が良好になり、クラスの雰囲気も明るくなった。
- 他クラスの保育士と会話をすることで、子どもの姿について新たな姿や考えに気付くことができ、アイデアを知る良い機会となった。
- 職員同士で他愛のない会話や雑談をすることで、関係が築かれ、普段から何気ないコミュニケーションがとれるようになった。その結果、保育が進めやすくなった。

実践計画（1 回目）

- 共に働く人の人間性や保育観などを知るためにクラス内で話す時間を作る。
  （午睡時に他クラスに協力してもらい、クラス内で話す時間を設けた。）
- その際、話しやすさを意識し、プライベートなことに踏み込みすぎない等の配慮をする。(こちらから話しやすい話題を提供したり、柔らかい雰囲気を作る。)
- 先輩に積極的に意見を伝えたり、保育についてのアドバイスをもらう。

実践からの振り返り

- 話し合いの場を意識的に設けたことで、子ども一人一人への理解を深め、姿や発達にあった援助を行うことができた。
- 聞き手側が耳を傾けてくれることで、後輩として話しやすかった。
  (聞いている際の表情が豊かであったり、頷いたりしている様子。)
- 話をしても聞いてもらえなかったり否定されたりすると、次に自分から意見を言う勇気がなくなってしまうのではないかと感じた。そこで、自分の話をしっかり聞いてもらえた、受け止めてもらえたと感じられるように相槌をしたり、にこやかに話を聞いたりするように心がけた。

研究成果（実践したことが子どもにとってどうだったか）

- 職員同士の関係が和やかだと、子どもが大人の顔色をうかがうことが減り、のびのび過ごしていることが分かった。
- 大人同士のコミュニケーションから子どもが話し方を模倣し、言語の獲得や子ども同士のやり取りが広がることにも繋がるので、話し方について気を付けるようになった。
- 職員同士の風通しが良くなることで自然と子どもの姿について話し合う機会も増え、子どもの興味関心に沿った活動を保育の中に取り入れることができた。
- 保育士同士のコミュニケーションが増えることで、新しい保育の気づきが生まれ、子どもの理解に繋がり、保育の幅が広がることが実感できた。
- 打ち合わせで決定する内容を、予め話しておくことで会議時間の効率化に繋がり、時間を有効に使えた。
- 職員同士の対話やコミュニケーションを意識したことで職員間の連携が以前よりスムーズになり、保育で必要な子どもについての情報も共有しやすく、明るい雰囲気で保育ができることへ繋がっていると感じた。

◆　実践を通しての気づき　◆
～皆さんに伝えたいこと～

メンバーがディスカッションして伝えたいことを
イラストや短いメッセージにしました。

★話しやすい関係作りは小さな会話から始まる。
★思い切って話しかけることで気持ちが変わっていく。
★お互いが話しやすい雰囲気を作っていくことが大切。
★アドバイスが自分のちからになる
それぞれの思いを尊重しよう。

★それぞれの思いを共有しよう。
★笑顔で話しかけることがきっかけになる。
★コツコツためよう話しやすさと明るい職場。
★互いの保育を共有していこう。
★話すタイミングを逃さずに対話をしよう。

★声を出し合い子どもを支え合おう。
★話しやすい雰囲気は自分から作る。
★自分のクラスだけでなく他のクラスに協力してもらうことも大切。
★時間を捻出する意識をもつ。
★伝わっているか確認してみる。

テーマ　３

保護者と保育士の連携・協働

～共に育てる～

現状と課題

子どもの一番身近な存在である保護者との連携・協働の在り方は、保育園にとって取り組むべき重要なテーマである。家庭と園が連携せずに別々に関わるならば、戸惑い、悲しむのは、子どもである。

子どもの幸福と成長には家庭と園の両方が大事な環境である。子どもを中心として「共に育てる」ために、より良い連携・協働を築いていく具体的な方法について実践的に研究する。

実践による期待される成果

本研究によって、保護者が話しやすい雰囲気をつくること、保護者に分かりやすく伝えること、保護者からも家庭における子どもの様子を伝えてもらえるようになること、互いに相互理解を深め、伝え合える関係性を築いていくことなど、具体的、実践的な方法が示されることが期待される。

今、保育士も保護者も多忙な日々を送っており、限られた時間を活かして保護者と保育士とが協力して子どもの成長を見守り、子どものために力を合わせる関係作りができることも又期待される。

各グループの実践のテーマ

＜１グループ＞信頼を得る送迎時の関わり方
＜２グループ＞ます笑顔からスタート～保護者対応
＜３グループ＞保育士の思いが届く保護者への関わり方
＜４グループ＞保護者に寄り添ったコミュニケーションのとり方
＜５グループ＞保護者への情報発信の仕方

1グループ

実践テーマ

信頼を得る送迎時の関わり方

どのようなグループ研究をするか、子どもの様子を通してみた研究課題

＜研究課題＞

- 子どもの保育園生活に関心が薄いケースがある。
- お迎え時に話をしたい保護者へ十分なコミュニケーションが取れずにいる。
- 時間のない保護者へ保育の様子を伝えたいがうまくいかない。

- 子どもの保育園生活に更に興味を持ってもらい、家庭で子どもとの会話を増やしてもらいたい。
- 保護者との効果的なコミュニケーションを促進するための方法を考える。
- 保護者にポイントを整理して、短い時間で伝えられるよう工夫する。

子どものねがい

「園で楽しかったことや、できるようになったことを保護者に知ってもらえたら、日々の活動がもっと楽しくなる」

保育士のねがい

「保育参観・保育参加に来てもらい、保育園での生活により興味を持ってほしい。」

実践計画（1回目）

- 子どものエピソードをメモする。保護者に伝えたいことを短くまとめておく。
- チェックノートを使い、お迎え時に子どものエピソードを話した保護者に印をつけ、コミュニケーションに偏りがないようにする。
- 保護者から悩みの相談があった時は、丁寧に聞き取ろうとする態度を示す。内容によってはその場で即答せず他の職員と話し合って対応する。
- 職員間で統一した対応ができるように職員同士が連絡をとりあって共通理解を持つ。

実践からの振り返り

- 伝えたいことを事前にまとめておいたことで、短時間でスムーズに伝えられた。

- 時間帯によって詳しく話ができた人とそうでない人の偏りがあることに気付いた。
- 送迎が保護者本人でないこともあり、子どもの様子を直接伝えることが難しい場合もあった。
- 園行事にあまり参加できない保護者にはアプローチが届きにくいと感じた。

実践計画（２回目）

- 挨拶をし笑顔で対応する。
- 興味を持ってもらうよう写真を活用する。
- 保護者とよりコミュニケーションが取れるよう、子どもだけでなく保護者の良いところも伝えるようにする。
- こちらから小さな相談事を持ち掛けて、相談しやすい関係性を作る。
- 保育園の生活に興味を持ってもらえるよう、保育参加・参観を呼び掛ける。

実践からの振り返り

- 写真など具体的なものを使用すると様子が伝えやすかった。しかし個人情報などの扱いに気を付ける必要を感じた。
- 保護者自身について会話することで、話しやすい関係を築くことができた。
- 家庭での子どもの様子を保護者から教えてもらえるように意識的に働きかけることができた。
- 保育参加に来てくれる家庭が増えた。

研究成果（実践したことが子どもにとってどうだったか）

- 写真等を使って保育園の様子を伝えたことで親子での会話が広がり、保育士ともコミュニケーションがとりやすくなる。
- 保育園と家庭との目線を合わせることで子どもの成長を共有でき、子ども自身の自己肯定感が高まることが分かった。
- 日々のコミュニケーションから保育参加や参観の出席率が高まり、子どもも保護者に見てもらえているという満足感を得て良い結果につながった。
- 日頃から保護者との関係性を築くことで、怪我の報告など言いにくい出来事を伝える保育士の心理的な負担感が軽くなったように感じた。
- エピソード等を整理しておくことで、忙しい保護者に対しても要点をまとめ、最低限の時間で伝えることができた。
- 保護者が保育参加や参観に出席し保育士が第三者からの目を意識することによって自身の保育を見直すきっかけに繋がった。

2グループ

実践テーマ

まず笑顔からスタート～保護者対応

どのようなグループ研究をするか、子どもの様子を通してみた研究課題

＜研究課題＞

- 保護者との連携が取りにくかった。また、なかなか伝わりにくいこともある。
- 保護者が連絡ノートを記入していないことがある。

→

- もっと保護者とコミュニケーションを取りたい。
  もっと連携を図りたい。
  どのようにしたらよいか具体的な方法を研究したい。

子どものねがい

「大好きな保護者と保育士が笑顔で話していると、嬉しい」

保育士のねがい

「保護者との効果的なコミュニケーションを探り、連携強化を図りたい」
「乳児は、言葉で自分の経験を伝えることができないので、気持ちや願いを理解して不利益にならないようにしたい」

実践計画（1回目）

- 笑顔で挨拶をする。
- 送迎時にその日にあった子どものエピソードを伝える。口頭で身振り手振りを交えて分かりやく伝える。
- 連絡ノートに子どもの様子を具体的に記載する。

実践からの振り返り

- 保育士が笑顔だと保護者も自然に笑顔になることが分かった。
- 送迎が重なり、子どものエピソードを伝える時間がなかったので、職員間での引継ぎをすることにした。しかし全員で話す時間の確保が難しく、引継ぎがうまくいかないことがあった。
- 口頭と連絡ノートで子どもの様子を伝えることで、家庭からの連絡ノートの記入率が上がった。

実践計画（２回目）

- 口頭では、身振り手振りを交えながら伝える。
- 連絡ノートでは、情景が浮かぶように遊んでいる場面ややりとりを具体的に書く。
- 遊んでいる様子や成長との繋がりなど、それぞれの保護者に伝える。

実践からの振り返り

- 保護者の方からもコミュニケーションを取ってくれることが増えた。
- 保護者から家庭での子どもの様子を伝えてくれるようになった。

研究成果（実践したことが子どもにとってどうだったか）

- あまり表情の見えなかった保護者の方も、保育士が笑顔で子どものエピソードを話すと自然と表情が和らいだり話したりする姿があった。
- 保育士と保護者が笑顔で話していると、子どもも会話に加わったり、自ら楽しかったことを話したりする姿があった。
- 笑顔は保育士と保護者と子どものコミュニケーションのきっかけとなることに気付いた。
- 話しかけやすい雰囲気作りと話を聞こうとする姿勢が、保護者に伝わると、お互いにコミュニケーションがとりやすくなった。
- 園での子どものエピソードを話すと、同じような場面のエピソードを「実はこの間、家でも…」と、保護者発信で話してくることがあった。
- 保護者と園で子どもの様子を共通理解できるようになってきた。

3グループ

実践テーマ

保育士の思いが届く保護者への関わり方

どのようなグループ研究をするか、子どもの様子を通してみた研究課題

＜研究課題＞

- 園からのお知らせや子どもの様子を伝えても伝わりにくい。
- 伝え方が難しい。
- 保護者間での情報共有が難しい。

- 保護者の方がイメージしやすい伝え方を考える。
- 外国籍の保護者には母国語による伝え方を考える。
- 保護者間で情報共有をバックアップできるような言葉かけを工夫する。

子どものねがい

「思いを受け止めてもらい安心したい」

保育士のねがい

「保護者間で情報共有して欲しい。子どもが困らないよう協力し合いたい」

実践計画（1回目）

- 保育士間の振り返りを伝えたり、子どもの様子をメモで伝えたりし、保護者に伝えることで重要性を感じてもらう。
- 保護者と直接会える機会を大切にし、親しみやすい雰囲気でコミュニケーションを取る。会えない保護者にはメモで連絡事項を伝え、「パパ（ママ）にもお伝えください」という言葉を添える。
- 保育士の関わり方を伝えることや必要なことを伝える。外国人の保護者にはタブレット端末の翻訳機能を活用する。

実践からの振り返り

- 保護者に「どうしてそうして欲しいのか」をしっかり伝えることで、意識して行動してもらえるようになった。
- 園での子どもの様子を詳しく伝えることで、保護者にも家庭での様子を伝えてもらえるようになった。

- 直接会えた時に子どものポジティブな姿をエピソードで伝えたことで、保護者から子どものことなどの悩みを気軽に相談してもらえるようになった。
- 連絡ノートに遊びだけでなく生活の様子も記載するようにし、保育参観を通して子ども同士の関わりや保育士の関わりを伝えるように務めたが、伝えることの難しさを感じた。
- 伝達したいことをメモで渡すと、持ち物を確認してくれたが、毎回ではなかった。また「パパにも伝えてください」という一言が両親間で共有出来ず、難しいと感じた。
- 送迎時や連絡帳で、園での子どもの様子や保育士の関わり方を伝えていったが、どこまで伝わったのか分からなかった。保護者とのより良い関わり方の検討が必要だと思った。
- 子どもができるようになったことを伝えていったが、「それもできなかったんですね」とネガティブに受け取られ、伝え方は難しいと感じた。

実践計画（２回目）

- トラブルがあった時、保護者に対して、マイナス面だけでなくプラス面も一緒に伝える。子どものことに関して伝える時に、一度話すだけでは変わらないことが多いので、その都度話すようにする。
- 保護者の様子を気にかけながら声をかけるようにする。家庭でも実践できる関わり方を一緒に考えるようにする。
- 子どもに対して、思いを受け止め、気持ちが満たされるように関わる時間をとる。

実践からの振り返り

- 保護者に家庭では分からない「他児との関わり」の様子を知ってもらうきっかけとなった。
- 送迎時に、保護者に対して一言ねぎらいの言葉を添えると表情が和らぐのを感じた。
- 子どもの思いを受け止めたことで、子どもが以前よりも少し気持ちが落ち着いた姿が見られた。

研究成果（実践したことが子どもにとってどうだったか）

- 保護者に子どもの様子や関わり方を丁寧に伝えることで、保護者の子どもへの関わり方が良くなり、子どもの気持ちも安定するようになり、保育園との連携に繋がると感じた。
- 保護者との信頼関係を築くことで、子どもの成長や発達に良い影響を与えることが出来ると感じた。

4グループ

実践テーマ

保護者に寄り添ったコミュニケーションのとり方

どのようなグループ研究をするか、子どもの様子を通してみた研究課題

＜研究課題＞

- 登園が遅いため活動に参加できない。
- 思いが通らないと泣く、イタズラをするなど注目して欲しい姿がある。
- 自分の思いを聞いてもらいたい様子が見られ、情緒不安定の時が多い。保護者と関わる時間が少ないことが一因のように感じる。

- 保護者と課題を共有し、協力し合う関係を作りたい。
- 子どもの情緒不安定に対処するために保護者と協力していく方法を考える。

子どものねがい

「注目して欲しい、自分の思いを聞いてもらいたい」

保育士のねがい

「保護者と協力しながら、関わり方を共有することで、子どものできることを増やしてあげたい」

実践計画（1回目）

- 注目を引きたくてやってはいけないことをする子どもの保護者には、保育園での様子を伝えると共に家庭での様子も聞く。
- 忙しい保護者や疲れた様子の保護者にねぎらいの言葉をかける。
- トラブル対応時に、双方の保護者に寄り添いながら話を聞く。それぞれの保護者にトラブルの経緯や理由を詳しく伝える。
- 食事に悩む保護者に保育園のやり方を伝える。（できたことを園と保護者で一緒に褒めるようにする。）
- なかなか定時に登園できない家庭に、登園時間の重要性を繰り返し伝える。

実践からの振り返り

- 忙しい保護者にねぎらいの言葉をかけることで何気ない会話が生まれ、関係が作れた。
- 保護者と協力して、園と家庭でやり方を共有することで、子どものできることが増えた。
- トラブルの経緯や理由をそれぞれの保護者に伝えることで、保護者の安心感が高まった。

実践計画（２回目）

- 行事への取り組みでは、毎回の子どもの姿を保護者に伝えるようにした。
- トイレトレーニングの進め方や今の子どもの様子を保護者に伝え、家庭でも実践してもらう。
- 保育士の気を引く行動をする子どもについて、エピソードを保護者と共有し、家庭での様子も聞く。

実践からの振り返り

- 実践計画を実施することで、保護者との認識のズレが無くなり、安心してもらえるようになった。
- トイレトレーニングの進め方を伝えたことで、家庭でもおまるを購入し、保護者も意欲的になり、子どもの成長を分かち合えるようになった。
- 気になる子どものエピソードを担任間で共有し、良いところも交えて子どもの現状を保護者に伝えるようにした。保護者からも家庭での様子を伝えてくれるようになり、情報共有ができてくると、子どもの気持ちが安定する日が増えるようになった。保護者との関係性が築けたことが良かったのだと思う。

研究成果（実践したことが子どもにとってどうだったか）

- コミュニケーションを取ることで保護者が子どもへの関わり方に困っていることに気付くことができた。
- 保育士が園で取り組んでいることを伝えることで、子どもが家庭でも園と同じ対応をしてもらえるようになり安心感が大きくなったように感じた。
- 家庭での取り組みを園に伝えてくる保護者が増えた。園でのやり方が具体的であり家庭でも役立つことが分かった。
- 保護者対応を一人で行わず、保育士間で相談することで負担感が減り、保護者も担任だけでなく複数からの意見として聞くことが出来るようになった。

５グループ

実践テーマ

保護者への情報発信の仕方

どのようなグループ研究をするか、子どもの様子を通してみた研究課題

＜研究課題＞

- 行事や活動に参加したい、好きな服を着たいという子どもの姿がある。
- 登園時間が遅いケースがある。
- 延長保育の利用が多い家庭に必要なことを伝える時間が無い。

- 子どもの願いに応えてあげるにはどうしたら良いか、子どもたちの意見を聞きながら、工夫するようにしたい。
- 時間が取りにくい家庭に対して必要なことを伝える時間を取りたい。

子どものねがい

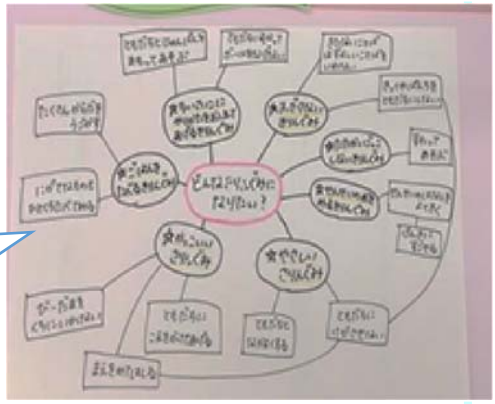
「行事や活動に参加したい。好きな服を着たい。」

保育士のねがい

「生活リズムを整え、集団生活ならではの経験をしながら楽しく過ごせるようになって欲しい。活動しやすい衣服で安全に楽しく過ごすことを好きになって欲しい。」

実践計画（1 回目）

- 好きな服を着たいという思いを受け止めながらも、園生活の中でどんな服を着たら安全で安心に過ごせるのかを、子ども達と一緒に話し合い、子ども達の中から出た意見をまとめてポスターにしてクラスの前に掲示し、保護者にも見てもらえるようにする。
- 行事のお知らせを保護者の立場に立って考え、伝え方を工夫する➡保護者の質問に対してポスターを示しながら答えるようにする。
- 子どもたちと話し合ったことを書き起こし、子どもたちがどんなことを考えてどんな話をしたのかを簡単にまとめて保育室の前に掲示し、家庭での会話に繋がっていくようにする。



子ども達の言葉を書き出した掲示

実践からの振り返り

- 保護者の立場に立って考えたことで、発信する内容も整理でき、要点が分かりやすいものにアップデートできた。長い説明ではなく、持ち物など分かりやすいように箇条書きしたり、端的に伝えられるように文章を考えたりした。
- 掲示したことで視診時にリマインドしやすくなり、不備や忘れ物が少なくなった。

実践計画（２回目）

- 登園時間が遅い家庭に対して協力をお願いしたい。➡口頭で翌日の活動や登園時間について話す。活動の前に行う準備時間が大切な事を伝える。
- 保護者が把握しやすいように口頭での伝達に加え、一週間の活動予定表を掲示する。
- 延長保育の利用が多い家庭に対して、受け入れ時の視診の時間を活かして、会って話ができる時は保護者のことをうかがったり子どもの様子を伝えるようにする。

実践からの振り返り

- 異年齢保育や散歩など特別な活動がある時には早い登園を意識してもらえたが、それ以外は変わらず遅く登園している。
- 少数だが、園の活動について掲示を見てもらえていないことがある。繰り返し声をかけ、園での様子に関心を持ってもらえるような関わりが必要である。
- 子どもが様々な活動を通して経験できることを増やしていくため、主活動開始前までの登園を継続してもらうよう、今後も工夫をしていく必要がある。活動の前の時間の大切さや園での様子を繰り返し知らせるようにする。また、就学に向けて生活リズムの整え方も意識してもらえるようにする。

研究成果（実践したことが子どもにとってどうだったか）

- 主活動の内容に加え、友だち同士の関わりなど、経験できることが増えた。
  一時的ではあるが、生活リズムが整った。（早く登園した日に限り午睡も取れている。）継続するために繰り返し声をかけていく。また、幼児クラスは小学校を見据えての生活リズムの話や、早く登園して午前中の活動に参加できることは子どもにとってプラスだったことを知らせていく。
- 朝から登園したことで気持ちの切り替えや整理がうまくいき、活動に集中できる様子が見られた。
- クラス全員が揃う時間が早まり、活動の時間を長く確保できるようになった。
- 声かけでの意識付けや予定表の掲示など、様々な対応を模索、実践することで、保護者の理解が深まり対応の幅も増えた。
- 受け手側の心理を考慮し、要点を簡潔にまとめた見やすい資料作りは、日頃のドキュメンテーションをはじめとした各種掲示にも活かせるスキルであり、その部分での向上を図ることができた。

◆　実践を通しての気づき　◆
～皆さんに伝えたいこと～

メンバーがディスカッションして伝えたいことを
イラストや短いメッセージにしました。

★エピソードを整理することで、
忙しい保護者にも要点を短時間で伝えられる。
★保護者の立場になって考える。
★写真やメモを使用すると、保護者に分かりやすい伝え方になる。

★笑顔で挨拶！
★保護者の『困った』に耳を傾けることを意識しよう。
★悩みの相談があったら、
丁寧に聞き取ることが大切。
★保護者と保育園が協力して、
子どもの成長を共に見守り、
共有することで子どもの
自己肯定感が高まる。

★笑顔は保育士と保護者と子どものコミュニケーションのきっかけとなる。
★子どものことだけではなく保護者自身について会話することで、
話しやすい関係を築くことができる。

６　プロジェクトメンバーへのアンケート

今年度のプロジェクト参加者がどのように研究に取り組み、自分たちの経験として学びを得たのか効果を把握するためアンケートを行った。

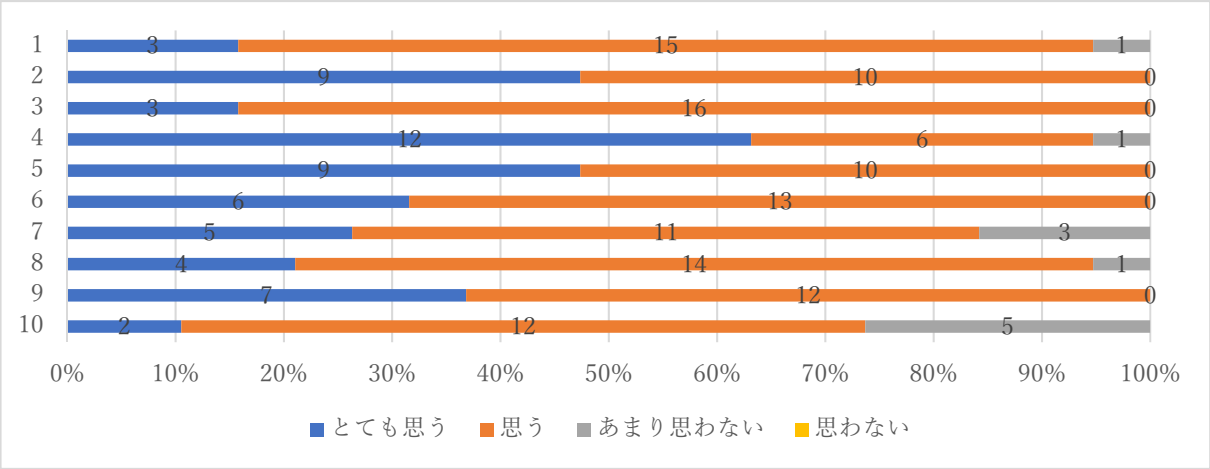
問１　研究プロジェクトに参加するため、個人的な生活面、職場の仕事面で困難に感じたことはありましたか。

非常にある	多少ある	全くない
６３％	３７％	０％

問２　この研究プロジェクトに参加し、港区の中堅保育士として以下の力の向上させることができたと思いますか。

質問事項
①自分の意見をまとめ、発表する力がついた。
②他者の意見を聴く力がついた。
③保育への関心、意欲がついた。
④保育において一人一人の子どもの課題を見つけることについて理解が深まった。
⑤保育では子どものために必要なことに気付き創意工夫することの理解が深まった。
⑥先輩保育士と協働することに自信がついた。
⑦後輩保育士と協働することに自信がついた。
⑧他のクラス担任と協働することに自信がついた。
⑨保育補助職員と協働することに自信がついた。
⑩職場で指導的役割を果たせる意欲と自信がついた。

※　　は特に研究メンバーの理解が深まったと感じられる項目である。



問３　他者との協働の難しさはどういうところですか？具体的にお答えください。

- 保育観や経験値の違い、決定権の所在、限られた時間の中で全員が納得して同じ方向を向いて働くことの難しさ。
- 考え方のすり合わせやその時間を作ることの難しさ。
- 相手の意見や考えを聞き、受け入れながら、自分の考えや思いと合わせること。

問４　中堅保育士としてのあなたのこれからの目標と課題について教えてください。

- 後輩育成（保育が楽しいと互いに思えるように）
- 保育を一番に、仕事の分担を工夫し、優先順位をつけ、効率的に業務を遂行する。
- 後輩が『あんな先生になりたい』と思う先輩になる。
- 一人一人が働きやすい風通しの良い職場に出来るように。保育の仕方や保護者対応等お手本となるように。
- 中堅保育士として先輩と後輩の橋渡しを積極的にしていこうと思った。そのために相手を知り、相手の話を聞いていきたいと思う。

（アンケート結果は抜粋して記載）

7　プロジェクト　参加者の感想から（アンケートから抜粋）

◇ 色々な園の先生の意見を聞く機会は貴重で、研修を園内でもやってみたい。直接対面して話し合うことで、互いの保育観や現場の状況について深く知ることができ、学びに繋がった。

◇ 時間的に話をすることの難しさも感じたが、他の人の意見を聞くことで学びがあった。自分の意見をはっきりと伝える大切さを学んだ。意見を言う、聞くことの大切さを学び、問題解決に向けて色々な方法があることを知った。

◇ ディスカッションを通じて自分にはない意見を聞き、同じ地区の他園の様子を知ることができた。発信していくことの大切さを学んだ。相手の話を聞き、話す中で自分の意見を分かりやすくまとめる大切さを学んだ。

◇ 他園の考え方や保育を学ぶことができ、反対意見を出す際の切り出し方を学んだ。他園と意見交換することで新しい発見があり、研究テーマ以外の学びを保育に活かせることが多かった。相手に意見を伝える際、簡潔に伝えることの大切さを学んだ。

◇ 相手に伝わりやすい言葉選びや説明の仕方、自分の思いを言葉にする力を学んだ。

◇ 保育観や経験値の違い、決定権を持つ人の違い、限られた時間の中で皆が納得して同じ方向を見て働くことの難しさを感じた。業務中のコミュニケーションのタイミングや考え方のすり合わせ、その時間を作ることの重要性を感じた。

◇ 意見の違いをどうすり合わせるか、相手の意見や考えを聞き受け入れながら自分の考えや思いと合わせていくことの難しさを感じた。時間がない中で簡潔に気遣いをしながら連携をとっていくことの難しさを感じた。

◇ 自分の思ったことを伝えたつもりでも、上手く伝わらなかったときの難しさを感じた。それぞれの思いを一つにして進んでいくことの難しさを感じた。お互いの思いを知り、理解すること、意見の不一致をどうしていくか等、コミュニケーションの取り方の重要性を感じた。

◇ 保育観のすり合わせの難しさを感じ、お互いの思いを受けてどうしていくかを考えた。それぞれが抱える思いの不透明さや価値観の違いを感じた。相手の思いを全て理解するのは難しく、話し合う時間の確保ややってみたいことへの他者の理解や協力を得ることの難しさを感じた。

◇ コミュニケーションの大切さを改めて感じたが、日々の業務に追われ、中々ゆっくりと話す時間がないことを感じた。考えを分かってもらうことや相手を理解することから始まり、コミュニケーションを取って信頼を築くまでに時間が必要であることの難しさを感じた。

◇ 年齢や経験の差がある中での良い関係作りの難しさを感じた。考え方が違うとお互いの考えを理解することに時間がかかる場合があることを感じた。相手に自分の思いを伝えることの難しさを感じた。

◇ どう思っているのか何を考えて行動したのかを共有し話し合わないと分からないことがたくさんあることを感じた。協働していくためにはコミュニケーションを積極的にとることが大切だと感じた。３テーマに分けて考えていったが、共通して大切なことも多いと感じた。

８　３年間継続して参加したメンバーの感想

３年間にわたり継続して行われた研究プロジェクトに参加したメンバーの感想文を掲載いたします。各メンバーがプロジェクトを通じて得た経験や学び、そして感じたことを率直に綴っています。彼らの貴重な意見や感想が、今後の研究活動やプロジェクト運営において参考になることを願っています。

３年間継続して本プロジェクトに携わらせていただき、初めは戸惑うこともありましたが、一人一人が園の代表として模索しながら、３年間それぞれのテーマについて研究を進め、徐々に内容の濃い実りあるものとなっていったのではと感じます。その中で毎年感じたことは『保育について語り合うことの大切さ』でした。

プロジェクトでは、同じ年齢のクラス担任や同じ地区というように共通点のあるグループ分けだったこともあり、それぞれの環境に差はありながらも別の視点からの気付きや刺激を受ける場面が多くありました。そして、自園の環境や子どもたちの姿と向き合い、直面している課題を事例としてまとめ言語化することで状況を整理でき、それらを共有し合うことで新たな課題が生まれ、次の実践に繋がっていく。そんなサイクルを研究の中で経験することができ、とても有意義な学びとなりました。

日々子どもと関わる中で、『保育とは何か』とふと立ち止まって考えることがあります。それは“生活面の自立を援助すること”であったり、“子ども自身の力を信じて支え、見守ること”であったり、職員の数だけそれぞれの保育観があると思います。『子どもの育ちにとって何が一番大切か』を考えた時に、まず大事なのは子どもの理解を深めること。そして次に、子どもの育ちを支えるチームとして互いに語り合いながら連携や協働を図っていくことが、初年度・次年度のテーマにもある“子どもの心を大切にする言葉かけ”や、“子どもが主体的に遊べる環境作り”にも通ずるものであり、ひいては保育の質の向上に繋がってくるのだと考えます。

社会情勢により対面のコミュニケーションが希薄化してしまった時代を経て、改めて保育について語り合い、互いの保育観を理解し合うことが何より重要であると、強く実感しました。

多岐にわたる業務を抱える保育現場ではありますが、忙しさを理由にせずコミュニケーションの場を意識的に設け、まずは目の前の子どもたちに還元していけるよう努めていきたいです。

赤坂保育園
青山保育園
南青山保育園

９　おわりに　令和６年度(2024)の研究について

○本年度の研究について

本年度の研究テーマは、保育の場において子どもの身近な大人による連携・協働の在り方について具体的に実践的に探ることである。保育の場は、連携・協働によって成り立っている。クラス担任間、補助的役割の人材（ここでは保育補助職員と呼ぶ)、栄養士、保健師、医師、地域の諸専門機関等々、沢山の連携・協働なくして保育は成り立たない。それらの連携・協働のなかに保護者も含まれる。本研究では、このような沢山の連携・協働の中で、保育士と保育補助職員（クラス担任の保育士と補助職員)、同じ保育士間における先輩と後輩（保育士としての経験年数の差がある保育の専門職)、そして保護者という３つのテーマを設けて、よりよい関係作りについて探ることにした。

子どもの身近な存在である大人同士のよりよい関係作りは、子どもにとって重要である。そのためには、子どもを中心に据えること、子ども一人一人が安心感、幸福感のある生活が与えられること、一人一人の学びと成長に相応しい援助が与えられることである。こうしたことは保育の質の向上を図る上で重要であるため、本研究テーマを、子どもを中心に据えつつ、３つのテーマ、保育補助職員との連携・協働、仲間同士の連携・協働、保護者と保育士の連携・協働とし研究を進めることにした。研究方法はグループ研究で、テーマにかかわる具体的な課題を探り、それについて保育計画を作成、実践、振り返りをし、グループ内で意見を出し合った。それらを材料としてまとめたのが、この報告書である。(報告書３，４、５を参照）本研究成果を港区のこれからの保育の質向上に役立てていただけることを期待したい。

○アンケートについて

本研究では、１年間の研究を終えた段階でアンケートを実施している。目的は、参加者にとってどれだけ成果があったか、日程を含めプログラムに無理が無いか等を知り、次年度に生かすためである。本年度のアンケート結果については、本報告書の「6　プロジェクトメンバーのアンケート」(42 ページ)をご覧いただきたい。港区の保育を担う中堅的人材の力量を向上させることを目標としたプログラムに参加した方々の意見・感想がまとめられている。

月 1 回研究会が開催され、グループ毎に研究発表したり、発表を聴いたり、質問したりする時間は３時間だが、アンケートの問１の回答が示しているように、現場を離れること、現場での実践的研究が容易ではなかったことが伺える。(アンケートでは、63%が職場の仕事面での困難を感じている。）その大変さ・しんどさを乗り越え、研究会で熱心に意見を交換する姿は生き生きとし、回を追うごとに主体性が発揮され、研究会自体も参加者主体の

自主性の高いものへと成長していったというのが、実感である。

アンケートでは又、この研究への参加が港区の中堅保育士として必要な力を向上させることに繋がったと実感している人が多い。（アンケート問２の結果を参照）

３年間計画の本プロジェクトは本年度が最終年度となる。参加された方々が港区の保育の質向上の中核的人材となって現場で力を発揮される姿こそ、本プロジェクトの成果だと思っている。

最後に３年間の研究会すべてに熱心に、主体的に参加してこられた３名の保育士の方々の感想、「8　3年間継続して参加したメンバーの感想」(44 ページ)の一文を紹介する。

『子どもの育ちにとって何が一番大切か』を考えた時に、まず大事なのは子ども理解を深めること。そして次に子どもの育ちを支えるチームとして互いに語り合いながら連携や協働を図っていくことが、初年度・次年度のテーマにもある“子どもの心を大切にする言葉かけ”や“子どもが主体的に遊べる環境作り”にも通ずるものであり、ひいては保育の質向上に繋がってくるものだと考えます。

上記をこの３年間の研究の総括とさせていただく。保育はチームであり、連携・協働によって成り立っている。より良い連携・協働を築くには、子どもを中心にして考え、意見を出し、意見を聴き、相談し合う関係作りを軸にすることが不可欠である。

（文責：阿部真美子）

＊港区保育の質向上のための研究プロジェクトは３年間の取組みで、本年度が最終の３年目となる。１年目は「子どもの心を大切にする言葉かけ」、２年目は「子どもが主体的に遊べる保育環境を考える」というタイトルの報告書が公表されている。本年度の報告書と併せて読んでいただけると大変嬉しい。

※　港区ホームページ　保育の質の向上のための研究プロジェクト
https://www.city.minato.tokyo.jp/hoikushidou/kenkyuproject.html

研究アドバイザー

山梨県立大学名誉教授、聖徳大学名誉教授　　阿部　真美子

保育の研究プロジェクトメンバー

保育園名	保育園名
麻布保育園	西麻布保育園
白金保育園	芝保育園
青山保育園	高輪保育園
こうなん保育園	本村保育園
飯倉保育園	赤坂保育園
南麻布保育園	芝公園保育園
伊皿子坂保育園	台場保育園
南青山保育園	芝浦橋保育室
青南保育室	にじいろ保育園竹芝 分園
ベネッセ港南保育園	ニチイキッズ芝公園保育園
小鳩ナーサリー浜離宮	sakura 保育園六本木
ミアヘルサ保育園ひびき白金高輪	高輪さつき保育園
赤坂山王保育園	

事務局　　港区子ども家庭支援部子ども政策課子ども施設指導係

令和6年度港区保育の質の向上のための研究プロジェクト報告書
令和7年3月

事務局　港区子ども家庭支援部子ども政策課子ども施設指導係